して経口摂取が可能であることが明らかになったことから、マニュアルには摂食・嚥下機能の評価やリハビリテーションなどの項目も入れるべきであるとの結論を得た。平成 21 年度は上記の点を中心にマニュアルの作成に取り掛かった。このマニュアルについて、HP に掲載し意見を求めた。平成 22 年度は寄せられた意見をもとに、約 60 頁にわたるカラー刷りの「長期 NICU 入院児の退院に向けた栄養管理マニュアル」が完成した。このマニュアルは全国の NICU 施設に送付する予定である。

7. 新生児医療施設・小児医療施設・在宅医療環境を結ぶコーディネーターの機能と役割・問題点に関する研究

研究分担者　飯田　浩一

1.　周産期医療体制整備指針改定を受けて、NICU 入院児支援コーディネーター（以下、コーディネーター）の配置等について都道府県と総合周産期母子医療センターの両者にアンケート調査した。

コーディネーター配置は平成 20 年度は 0 都道府県、21 年度は 3 府県、22 年度は 12 都道府県と増加していった。コーディネーターと同様の役割を担う職員がいる総合周産期母子医療センターが 25 施設あった。

都道府県と総合周産期母子医療センターの間に認識の違いや現状把握のずれがみられた。

2.　コーディネーターの役割と問題点を明確にした。

役割は、

①NICU と地域の医療施設・福祉施設・行政機関との連携の構築

②長期入院児の自宅または療育施設への移行

③長期入院児の家族への医療面・福祉面での情報提供

④退院・転院した長期入院児の QOL の評価

⑤長期入院児の家族の精神面のサポート

に集約された。

問題点としては、小児在宅ケアを支える訪問診療所、訪問看護ステーション、介護ステーションへの教育が必要である点、一人のコーディネーターでは業務の負担が大きすぎる点、診療報酬上のメリットが不十分である点が挙げられた。

3.　在宅移行支援に向けた注意点として、

①患者家族と医療者が同じ認識を持ちながら在宅移行を進めていくこと

②患者家族だけに負担をかけないよう多職種の連携ができるように構築すること

③患児への医療行為が在宅で可能な方法へ入院中から変更していくこと

が特に重要と考えられた。

8. 重症児者の地域で安全・快適な生活保障を NICU 入院中の重症障害児の療育施設への受け入れ状況の実態調査とその障害の分析

研究分担者　杉本健郎

第一年度：課題の整理・ブックレット作成

病院で急性期治療を終了し、結果として重度の障害が残り、常時医療対応（以下、医療的ケア）を必要とする場合、なかなか在宅医療へ移行できない厳しい状況が，医療と介護（福祉）の両面で存在し、救急、救命医療や医療的ケアの進歩により、「高度の医療的ケア」を必要とする小児は確実に増加している。

今回、こうした課題に対して、滋賀県および社会福祉法人びわこ学園で取り組んできた内容を研究分担者がまとめ、一冊のブックレットにし、全国の関連機関、病院に配布した。

1. 重症児者施設はほとんどが満床で、死亡退所以外では、地域の受け皿作り（たとえばケア・ホーム）をしないかぎり退所による空床はえられない。

2. ＮＩＣＵ受け皿に見合う重症児病棟の医療保険の増額がないと看護体制がくめない。
3. 短期入所についても、現在の介護給付では人工呼吸器装着児は安全に受け止められない。増額が必要である。
4. 重症児ケアマネージャーは重症児生活支援センターを立ち上げ、福祉職と医療職の最低二人態勢が必要である。平成 20 年からの都道府県コーディネーター事業も活用する。
5. 重症児者も住めるケア・ホーム事業にするには、医療のバックアップ体制作りと介護職の医療的ケア実施の認知と夜間の介護給付の大幅な増額が必要である。
6. 重症児者に対応出来る訪問看護ステーションにするには在宅看護の難しさを認知し、システムと診療報酬の大幅な見直しが必要になる。特に超重症児への訪問制限を成人の難病同等以上にする必要がある。

第二年度:施設からケアホームへの移住計画と研修テキスト作成配布

1. 昨年度からの研究の一環として、重症児者入所施設と自宅、ケアホームの「循環型」地域生活にむけての滋賀県の試行と進捗状況を報告した。
2. NPO 医療的ケアネットで非医療職への医療的ケア研修にむけての入門編を作成し、医療的ケアの理解と具体的研修方法を提示した。その本を全国の関係機関・個人に配布した。
3. 重症児者、特に医療的ケアを常時必要とする超重症児者の地域生活には地域でのリソースの不足と事業経費の考え方（二階建事業）について述べた。

第三年度：具体的なケアホームの調査

重症児者入所施設から、在宅介護の自宅から、地域の共同生活介護（ケアホーム・CH）へ「循環的」「選択的」に住まいを移すことができるかを検討した。高度の医療的ケア（気管切開や人工呼吸器）だけでなく、医療的ケアの必要な重度脳障害（全介助）の人たち＝超重症児者が地域に作られた CH で過ごす環境作りは、報酬単価のきめこまかな見直し、増額なくして不可能であることを全国の主な先進的取り組みをしている CH 訪問聴き取り調査で明らかにした。また現在の運営の費用体系の実際と課題についても言及した。

9. 療育施設と中間施設としての地域中核小児科との連携に関する研究

研究分担者　岩崎裕治

研究協力者　倉澤卓也、宮野前健、家室和宏、山口文佳、益山龍雄、小山久仁子、木内昌子、余谷暢之、冨田直、曽根翠、福水道郎、田沼直之

近年周産期医療の進歩に伴い濃厚な医療管理が必要となり、NICU への長期入院児が増加し、QOL の低下を招いている。一方療育施設では、超重症児(者)が増加し課題も多い。また施設入所の待機児(者)も多数いる。21 年度は、療育施設や地域中核病院における NICU 長期入院児の受け入れや在宅支援、地域連携につき実態を調査した。22 年度は NICU 長期入院を経験した施設入所家族へのアンケートにより、在宅生活に必要な支援を検討した。また在宅支援や施設への移行につき、効果的で、特徴のある連携を構築している地域を選び聞き取り調査を行い、地域連携に必要な条件を検討した。さらに、地域連携に必要な情報共有ツールを作成した。

方法：1．全国の療育施設、地域中核病院における NICU 長期入院児を含む入所の受け入れ状況や、関連機関との連携など実態等をアンケート調査した。

2．NICU 長期入院経験児で入所されている家族へのアンケートから、在宅に必要な支援を検

討した。

３．地域の在宅支援や施設への移行につき、効果的で特徴のある連携を構築している地域を選び、聞き取り調査を行った。

４．地域連携の情報共有に必要な連携手帳を作成した。

結果：１　療育施設では、NICU 長期入院児の受け入れにつき、QOL の改善などそのニーズは理解されてきている。しかし入所待機児（者）も多く、また超重症児（者）など濃厚に医療が必要な入所児（者）が増加している。人工呼吸器管理の受け入れには差があり、受け入れには、看護師・医師不足の改善、医療器材などのハード面の改善、診療報酬などの改善、家族の理解などが必要であった。また入所された児の急変時の後方支援や情報交換などの連携を望む意見も多かった。NICU 長期入院児を療育施設で受け入れる際には中間施設を経ることで、NICU と療育施設の環境・医療レベルの違いや合併症の治療、家族の絆の形成などの課題の解決が期待できる。しかし地域中核病院では、必要性は認めるものの自らの病院が中間施設となり得ると考えている病院は少ない。今後、議論を進めていく上で、中間施設の具体的な中身の検討等が必要である。

２．NICU 長期入院既往のある施設入所児の家族アンケートでは、入所理由は患者本人の体調、介護や医療的ケアを心配が半分以上であった。26%の家族が施設移行時の説明が不足とし、経済的な面や療育施設の医療・生活環境につき説明が欲しかったとのことであった。また在宅支援として、短期入所、訪問看護、訪問診療などを必要としていた。

３．３地区の地域連携・在宅支援につき、聞き取りを行なった。その結果、１）それぞれの関係性がとても強い。２）ケースを通じて作り上げてきた連携がある。３）それぞれの施設長が強いリーダーシップを発揮して、方向性を明確にしていることが、連携がスムーズに機能している要因と考えられた。

４．多摩療育ネットワークの医師達の協力のもと、主に医療連携、特に救急時などの際に一目でその患者の特徴がわかるような、簡略な情報共有ノートを作成した。また患者の情報をすべて網羅できる情報共有ブックについて評価をおこなった。アンケートでは、情報共有に役立ち、介護者の負担軽減につながっていたが、医療者側に必要性が伝わらなかったという意見もあり、今後、医療者側の意見も取り入れて改善を図っていきたい。

５．NICU 長期入院児を含め、重症児（者）がその地域での生活を豊かに営むことが出来るようさまざまな角度から総合的に支援が出来るように、患児の情報を共有し、連携や支援の調整ができれば、重症児(者)の生活する範囲の拡大や充実につながると考える。そのためには、NICU、療育施設、地域中核病院、行政や関連機関が各地域の中でさらに連携を推し進め、お互いの施設の状況や考えを知り、家族を含めた強い関係性を構築し、その中でその患者や家族の状況に応じて役割分担をはかることが重要である。

10. NICU と療育施設・在宅医療を結ぶ中間施設候補に対するアンケート調査

①１次調査

研究分担者　田村正徳

研究協力者　奈倉道明、高田栄子、櫻井淑男、森脇浩一

研究方法：日本小児科学会認定の指導医が在籍する全国の病院（508 施設）に対し、一次アンケート調査した。主要な質問は、「呼吸管理が必要な NICU 長期入院児を在宅医療や療育施設に移行した後に、患者が急性増悪した場合、

一時的な呼吸管理を目的として受け入れ可能ですか？」である。この質問に対し、①可能、②条件付き可能、③不可能の３つの選択肢を提示した。また、その病院の人工呼吸管理能力も合わせて調査した。

結果：回答率 422/508=83％で回答の結果は、受け容れが「可」の病院 165、「条件付可」177、「不可」80、であった。「可」の病院は小児科医 9 人以上、看護師 26 人以上、病床 34 以上、占有されない人工呼吸器を 5 台以上持ち、毎日救急患者に対応している施設であった。

可と条件付可の病院数を都道府県の人口 100 万で補正した地図上の分布は図 4 の通りで近畿地方が比較的充足していたが首都圏は厳しい状態であった。

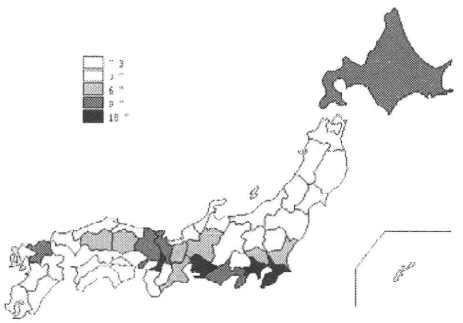

図 4：緊急受入可・条件付き可の施設の 100 万人口あたりの全国分布

NICU と療育施設・在宅医療を結ぶ中間施設候補に対するアンケート調査

②2 次調査

研究分担者　田村正徳

研究協力者　奈倉道明、高田栄子、櫻井淑男、森脇浩一

研究方法：日本小児科学会認定の指導医が在籍する全国の病院（508 施設）のうち一次アンケート調査で急性増悪時の一時的な呼吸管理を目的として受け入れが可と条件付可の施設に対して「NICU で長期に呼吸管理されている児を、在宅医療に移行されるための準備として、小児科病棟に転棟させることは可能ですか？」との質問を中心に二次アンケート調査を実施した。

結果：可が 54(31%)、条件付き可が 99(56%)、不可が 24(14%)あった。

可と答えた 54 病院の全国分布を図 5 で示す。

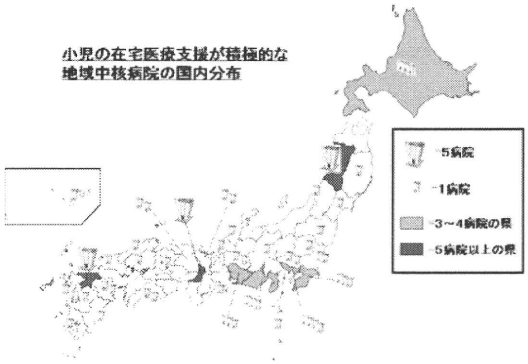

図 5　NICU で長期呼吸管理児の在宅医療移行のための受け入れ可の施設の都道府県分布

NICU と療育施設・在宅医療を結ぶ中間施設候補に対するアンケート調査

③3 次調査

研究分担者　田村正徳

研究協力者　奈倉道明、高田栄子、櫻井淑男、森脇浩一

研究方法：日本小児科学会認定の指導医が在籍する全国の病院（508 施設）のうち 2 次アンケート調査で期 NICU 重症児を退院させて在宅医療へ移行させた経験の有りの 22 病院と埼玉県・東京都にある重症心身障害児施設（以下、重心 12 施設）に対し、3 次アンケートを依頼した。その骨子は、①医療福祉の情報を得るためにどのような社会資源を利用しているか、②我々が作成している在宅医療支援マニュアルが妥当なものか、③NICU 出身重症児が他の患者と比較して特徴があるのか、④在宅医療への移行において医療制度上改革すべき点はないか、という内容であった。

結果：10 の中間施設と 9 の重心施設から回答を得た。中間施設では、利用する社会資源が地

方自治体の障害福祉課、院内のソーシャルワーカーから情報を得ることが多かった。重心施設では、これらに加えて患者が患者家族会から情報を得ている様子が見られた。在宅医療マニュアルに関しては、その内容に関して議論の余地はあるものの、その存在を肯定的に受け止められていた。中間施設においては、NICU 出身の重症児を退院させることに困難を感じていた。その理由としては、家族の在宅医療への受け入れが難しいこと、家族の要求が高いことが考えられた。しかし重心施設では、NICU 出身の重症児に際立った特徴を感じている施設は少なかった。医療制度に関しては、在宅酸素療法における SpO2 モニターの使用料、在宅経管栄養における非消化体栄養剤の使用料の補助を求める意見が多かった。

11. 長期 NICU 入院児の在宅医療移行における問題点とその解決

研究分担者　前田浩利

①全国の 11,928 ヶ所の在宅療養支援診療所に小児在宅医療に関する経験に関してアンケートを実施し、1,409 ヶ所からの回答があり、その中で 19 歳までの小児を在宅で診療したことのある診療所は、367 ヶ所で 26%であった。19 歳までの小児を 10 人以上診療したことのある診療所は、31 ヶ所で 2.2%であった。まだまだ小児在宅医療が、在宅療養支援診療所の中でも浸透していないのが現状と言える。しかし、「小児科領域の患者を今後在宅にて診療しようと思われますか？」との問いには、診療したい、状況によっては診療したいと回答した診療所が 687 ヶ所、48.7%で、今後小児在宅医療を行いたいと、かなりの在宅療養支援診療所が考えていることがわかった。また、「小児科領域の患者を在宅で診療することについて感じておられる難しさをお答えください」という質問に対して、「小児の経験がないのでわからない」671 ヶ所、47.6%「小児に関しての依頼や相談が無い」322 ヶ所 、22.9%で適切なサポートあり、更に小児を診療しても良いと考えている在宅療養支援診療所を探し出せる仕組みがあれば、更に小児在宅医療が広がる可能性が感じられた。また、「小児科領域の患者を診療するにあたりこれならば診療できると思うものを 1 つお答えください」という質問に対しては、「紹介元の病院が、いつでも受け入れてくれるなどの支援があれば診療してもよい」550 ヶ所、39.0%「小児科医とのグループ診療なら診療してもよい」393 ヶ所 、27.9%「小児に対応した訪問看護師の支援があれば診療してもよい」124 ヶ所 、8.8%と紹介元病院との連携、小児科医との連携、訪問看護ステーションとの連携があれば、多くの在宅療養支援診療所が小児を診療する可能性があることが示唆された。

2. 千葉県障害福祉課療育支援専門部会の協力を得て県内で在宅療養をしている医療ケアが必要な重症児へのアンケート調査を行い、その現状と在宅ケアにおけるニーズを分析した。千葉県調査で 201 名、訪問診療を行っているあおぞら診療所新松戸の患児で 39 名から有効な回答が得られ、それを分析した。訪問診療を受けている患児と訪問診療を受けていない患児のグループに疾患の重症度、必要とする医療ケアには大きな差異は認めなかった。大きく差が出たのは、訪問看護と訪問介護（ヘルパー）で、訪問看護を必要としないと答えたのは訪問診療を受けている群では 14.6%だが、受けていない群では 55.2%であった。また、訪問診療を受けている群の 79.1%が訪問看護を良く利用していると答えたのに比べ、受けていない群では良く利用していると答えたのは 15.6%だった。また、ヘルパーを不要と応えたのは訪問診療を受けている群の 44.7%で、受けていない群では 56.2%で差を認めなかった。しかし、よく利用

しているのは訪問診療を受けている群では27.7%、受けていない群では7.7%であった。

12. 高度な医療的ケアを必要とする乳幼児と家族のための在宅移行支援策-情報提供・収集・交換のツールとしてのウェブサイトの活用-

研究分担者　田村正徳

研究協力員　山口文佳、奈倉道明

研究方法：平成 20 年度は、研究員の臨床現場での事例分析、そして文献検索とネット検索により気管切開以上の人工呼吸管理が必要な乳幼児の在宅支援に対する情報を整理し、具体策を検討した。

平成 21 年度は、実際にウェブサイトを開設し、サービス提供者に対して情報提供を試みるとともに、2009 年の主要な小児関係学会の会議録を収集し、本課題について 2009 年現在の医療者側からの取り組みを分析した。

平成 22 年度は、在宅医療に対する情報を家族とも共有するために、家族を含めて情報提供できるサイト運営を検討した。1983 年以降の文献を検索し、本課題がこれまでどのように取り組まれ、何が解決し何が残っているか、時間経過とともにどのように変化してきたかを分析した。これらの結果から、情報提供内容と更新方法を具体的に計画することを目的とした。

研究結果：

1．文献検索

高度な医療的ケアを必要としながら退院する児について、平成 21 年度は 21 年現在の論点を中心に、平成 22 年度はウェブサイトで検索可能な 1983 年から 2010 年の論点の推移を検討した。高度な医療的ケアを必要とする子どもたちの在宅生活には、多職種、地域行政機関、民間サービスなどの関係者との強力な連携が必要で、本人の QOL の確保と発達支援、家族の心理を理解した上での支援が必要であることは、1980 年代から提言されてきた。1990 年前後には在宅酸素療法が普及し始め、医療的ケアを取り巻く問題、医療だけではなく生活環境全般への対応を課題として認識され取り組みが紹介されるようになった。その後、在宅医療技術も進歩し在宅で管理できる医療的ケアの種類も拡大している。行政対応も地域格差もありまだ不十分であるが変化している。

2. ウェブサイトの運用

本研究班で試作した乳幼児の在宅医療支援マニュアルの内容についての議論、在宅医療支援に役立つ情報収集と情報提供を目的に平成 21 年に医療的ケアを必要とする乳幼児のための在宅支援研究会を発足させ、そのウェブサイトを公開した。議論はサービス提供者からだけ参加できるように設定した。しかし、反応に乏しく 22 年からはサービス提供者だけでなく家族も参加できるように設定して、コンテンツを修正しているところである。

D．本研究成果の専門的･学術的意義

①長期入院児の動態調査法を開発したこと。これにより長期入院児の全国での年間発生数だけでなくその転帰を明らかに出来る。

②動態調査の結果、特に新生児仮死が基礎疾患となっている場合に NICU からの転出が困難な事例が多いことが判明した.

③慢性呼吸管理児長期入院児の栄養管理上の諸問題を明らかにして、早期退院に向けた栄養管理マニュアル案を作成した。

④医学的には療育施設/在宅医療に移行可能な重症児の実態を調査し療育施設や在宅医療への阻害要因を明らかにした。

⑤小児救急体制整備のために集約されつつある地域小児科中核施設の中間施設としての活用の可能性と問題点を明らかにした。

⑥中間施設や療育施設や在宅医療への移行を推進するためにはインフラ整備とともにNICU

入院時からの正確な予後予測と家族指導が重要であることを明らかにし、そのためのガイドラインを作成した。

⑦中間施設が在宅医療支援をするためのマニュアル案を作成した。

⑧　高度な医療的ケアを必要とする乳幼児と家族のための在宅移行支援策情報提供・収集・交換のツールとしてのウェブサイトの有用性を明らかとした。

E．行政的観点・期待される厚生労働行政に対する貢献度等

①長期入院児の動態調査の結果、約 100-120 例に対して毎年受け入れ施設や在宅支援体制を整える必要があることが判明した。

②長期入院児の動態調査の結果、特に新生児仮死が基礎疾患となっている場合に NICU からの転出が困難な事例が多いことが判明したので、研究代表者等が推進している日本版新生児心肺蘇生法ガイドライン普及活動の重要性が明らかとなった。

③周産期医療施設における DICU や在宅医療支援病棟が、母児関係の改善や重心施設との連携やスタッフ/家族の退院へ向けた意識づけの促進に貢献する事が判明した。

④我々が提唱する重症障害児となる可能性の高い事例の入院時からのケアと家族指導のガイドラインは、NICU スタッフの意識改革と NICU 長期入院事例の減少に役立つ事が実証された。

⑤我々が提唱する慢性呼吸管理児の栄養管理マニュアルは在宅医療や重心施設・中間施設への移行促進に役立つと思われる。

⑥小児医療センターの慢性呼吸管理病棟を地域の在宅医療支援に活用するモデルを提唱した。

⑦全国の地域中核小児科施設の相当数が慢性呼吸管理児受け入れの“中間施設候補”になる責任を自覚していることと、その受け入れ条件を明らかにした。また“中間施設候補”の地域較差も明らかとなった。今後は中間施設の具体的な中身の検討が必要である。

⑧医学的には在宅人工呼吸が可能な患者が在宅医療に移行できない理由としては、家庭的要因が半数以上を占めており、緊急入院やレスパイト入院の保証を含めた在宅支援体制を整備して家族の負担や不安を改善することが重要である。

⑨特に乳幼児の在宅医療では在宅療養支援診療所/訪問看護ステーション等の地域で支えるシステムの整備が成人に比較して遅れており行政の誘導策が必要である。

⑩NICU 入院中の重症障害児の療育施設への更なる受け入れは、待機児（者）も多く、また人的・経済的支援を増強しなければ極めて困難である。

⑪周産期医療対策事業における NICU 入院児支援コーディネーター制度の啓発への応募を総合周産期母子医療センターの責任者に啓発した。

⑫乳幼児在宅医療を支援するための情報提供・収集・交換と本研究班の各種マニュアルの批判的吟味を目的として会員制のウェブサイトを開設した。

⑬行政関係者に NICU 長期入院児の中間施設や在宅医療への移行の為の政策を進言した。

⑭以上の様な周産期医療関係者や地域中核小児科や療育施設や在宅医療関係者や行政への啓発活動や提言が NICU 長期入院児の減少傾向の一助となった。

F．普及啓発活動件数（ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ、講演、ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ）

・　平成 20 年から 22 年度まで毎年 2 回ずつ全

国の NICU 施設責任者（新生児医療連絡会と日本周産期・新生児医学会専門医制度基幹及び指定研修施設）に対して NICU 入院児支援コーディネーター補助事業の紹介と当該年度予算でコーディネーターの配置を都道府県に対して要望するよう呼びかける資料を緊急送付した。

・「杉本健郎、田村正徳．重症児者の地域で安全・快適な生活保障を．滋賀県とびわこ学園の取り組みと今後の課題．2008 年 12 月出版」
療育側の施設が NICU 卒業生をうけいれる場合の問題点を分析したブックレットとして全国の重心施設・NICU 施設・都道府県福祉医療担当部署に送付した。

・第 111 回日本小児科学会学術集会 2008.4/25
ミニシンポジウム　長期入院児と在宅医療

・杉本健郎が作成した医療的ケアの理解と具体的研修方法を提示した入門編テキスト「“医療的ケア“はじめの一歩」を全国の療育指導関係者に配布した。

・板橋等による「NICU 長期入院児の退院に向けての栄養管理マニュアル」案をアンケート調査協力施設に送付した。

・奈倉・田村による「在宅医療支援マニュアル」案をアンケート調査協力施設に送付した。

・第 12 回新生児人工呼吸・モニタリングフォーラム in Sinshu　2010.2/19
新生児心肺蘇生法普及活動の意義
新生児蘇生法普及のための学会認定講習会事業(NCPR)の現状と今後の課題（田村正徳）

・当研究班の会員制ウェブサイトを開設して高度な医療的ケアを必要とする乳幼児と家族のための在宅移行支援のための情報提供・収集・交換のツールとして活用中である。
【http://www.happy-at-home.jp】

・第 13 回新生児人工呼吸・モニタリングフォーラム in Sinshu　2011.2/16
「長期入院児の呼吸理学療法と在宅移行支援」とのテーマで公開討論会をおこなった。参加者は、医師 210 名、看護師 513 名、理学療法士 34 名、その他 113 名であった

G. 研究発表

(田村正徳)

Iwata S, Bainbridge A, Nakamura T, Tamura M, Takashima S, Matsuishi T, Iwata O.; Subtle white matter injury is common in term-born infants with a wide range of risks.. International journal of developmental neuroscience. 2010; 287:573-580

Perlman JM, Wyllie J, Kattwinkel J, Atkins DL, Chameides L, Goldsmith JP, Guinsburg R, Hazinski MF, Morley C, Richmond S, Simon WM, Singhal N, Szyld E, Tamura M, Velaphi S; Special Report Neonatal Resuscitation: 2010 International Consensus on Cardiopulmonary Resuscitation and Emergency Cardiovascular Care Science With Treatment Recommendations. Pediatrics 2010;125;e1340-e1347

Wyllie J, Perlman JM, Kattwinkel J, Atkins DL, Chameides L, Goldsmith JP, Guinsburg R, Hazinski MF, Morley C, Richmond S, Simon WM, Singhal N, Szyld E, Tamura M, Velaphi S; Part 11: Neonatal Resuscitation: 2010 International Consensus on Cardiopulmonary Resuscitation and Emergency Cardiovascular Care Science With Treatment Recommendations. Circulation 2010;122;S516-S538

Sakurai Y, Tamura M.; Is electric impedance tomography the white knight for acute respiratory distress syndrome?. Pediatr Crit Care Med.. 2010; 115:639-640

Madoka Aizawa, Katsumi Mizuno , Masanori Tamura; "Neonatal sucking behavior: Comparison of perioral movement during breast-feeding and bottle feeding. Pediatrics International. 2010; 521:104-108

Yoshio Sakurai.Toru Obata.Akio Odaka.Katsuo Terui.Masanori Tamura.Hideki Miyao; Buccal administration of dexmedetomidine as a preanesthetic in children. J Anesth. 2010; 24:49-53

田村正徳；シンポジウム 2:NICU と重症心身障害児(者)施設(病棟)との連携:新生児医療と重症心身障害児医療.日本重症心身障害学会誌 2011;36(1):65-70

櫻井淑男　田村正徳; 埼玉県における小児患者救急車搬送データにもとづいた中核病院候補選定の妥当性. 日本小児科学会雑誌. 2010; 114(12):1925-1927

田村正徳; 長期入院児支援システム. 母子保健情報. 2010; 62:1-10

田村正徳; 新生児蘇生法の普及に向けて. 妊産婦と赤ちゃんケア. 2010; 67-71

田村正徳; 日本版新生児心肺蘇生法ガイドライン. 周産期医学. 2010; 40(4):511-515

勝沼俊雄編　田村正徳　他; 新生児蘇生. 小児科診療　小児の治療指針　2010 年増刊号診断と治療社. 2010; 73:827-830

五十嵐隆編　渡辺とよ子編　田村正徳　他; 重篤患児の家族との話し合いのガイドライン. 小児科臨床ピクシス 16　新生児医療. 2010; 26-27

櫻井淑男　鈴木伸一朗　山崎博　栃木武一　宮崎通泰　田村正徳　赤司俊二; 埼玉県全域における小児救急患者救急車搬送の現状分析. 日本小児科学会雑誌. 2010; 114(3):525-530

田村正徳　宮川哲夫　福岡敏雄　木原秀樹; NICU における呼吸理学療法ガイドライン第２報. 日本未熟児新生児学会雑誌. 2010; 22(1):139-149

藤村正哲監　田村正徳編　森林太郎編　他; 改訂 2 版　科学的根拠に基づいた　新生児慢性肺疾患の診療指針. 改訂 2 版　科学的根拠に基づいた　新生児慢性肺疾患の診療指針MCメディカ出版. 2010; 1-128

Ezaki S, Suzuki K, Takayama C, Tamura M, et al; Resuscitation with mask CPAP - Is it useful for reducing oxygen exposure and oxidative stress in preterm infants?. J Paediatr Child Health. 2009; 45(s1):A116

Ezaki S, Suzuki K, Kurishima C, Miura M, Moriwaki K, Arakawa H, Kunikata T, Sobajima H, Tamura M.; Levels of catecholamines, arginine vasopressin and atrial natriuretic peptide in hypotensive extremely low birth weight infants in the first 24 hours after birth.. Neonatology.. 2009; 95(3):248-255

Ezaki S, Suzuki K, Kurishima C, Miura M, Weilin W, Hoshi R, Tanitsu S, Tomita Y, Takayama C, Wada M, Kondo T, Tamura M.; Resuscitation of Preterm Infants with Reduced Oxygen Results in Less Oxidative Stress than Resuscitation with 100% Oxygen. Journal of Clinical Biochemistry & Nutrition. 2009; 44(1):111-118

齋藤誠　宮園弥生　田村正徳; ハイリスク新生児の医療体制をめぐる「話し合い」のガイドライン. 小児看護. 2009; 32(13):1705-1711

池之上克　近藤潤子　神谷直樹　宮崎亮一郎

田村正徳　他; 助産師業務ガイドライン 2009 改定版. 助産師業務ガイドライン　2009 改定版. 2009;
町浦美智子　大橋一友　中嶋有加里　佐々木くみ子　村上明美　田村正徳　中野美佳; 新生児の蘇生. 助産師基礎教育テキスト　第 5 巻　分娩期の診断とケア第 1 版第 1 刷日本看護協会出版会. 2009; 189-200
田村正徳; 助かる命を救う術、普及が進む新生児蘇生法. インスパイアーエア・ウォーター株式会社. 2009; 11:2-5
田村正徳; 周産期医療体制の問題点と今後の展望—新生児科の立場から—. Fetal&Neonatal Medicine. 2009; 11:24-28
山口文佳　田村正徳; 新生児科からみた成育限界へのチャレンジ. 周産期医学東京医学社. 2009; 39(10):1311-1316
櫻井淑男　田村正徳; 埼玉県小児救急車搬送年間データからみた小児救急医療における救命救急センターの役割. 日本小児救急医学会雑誌. 2009; 8(3):288-292
田村正徳; 長期入院事例　まとめ. 周産期医学東京医学社. 2009; 39(9):1244-1248
田村正徳; 予後不良児に対する治療方針の齟齬. . 2009; 39(8):1087
田村正徳; 新生児仮死の不適切な蘇生. 周産期医学. 2009; 39(8):1048
山口文佳　田村正徳; 新生児医療における生命倫理学的調査結果　第 1 部　ー在胎 22 週児への対応-. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2009; 45(3):864-871
田村正徳; 人工呼吸療法の新しい展開ー病態に応じたエビデンスに基づく"肺と脳に優しい"人工呼吸管理戦略ー. 周産期医学東京医学社. 2009; 39(7):839-840
長田浩平　櫻井淑男　浅野祥孝　小林貴子　荒川浩　森脇浩一　田村正徳; 地域中核施設における"準小児集中治療室"の意義. 日本小児科学会. 2009; 113(7):1141-1145
山口文佳、田村正徳; 新生児医療における生命倫理学的調査結果報告第二部　出生体重 400 g 未満児への対応. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2009; 45(2):565
山口文佳、田村正徳; 新生児医療における生命倫理学的調査結果報告第一部　在胎数 22 週児への対応. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2009; 45(2):565
山口文佳、田村正徳; 新生児医療における生命倫理学的調査結果報告第三部　18 トリソミー児への対応. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2009; 45(2):756
山口文佳、田村正徳; 新生児医療における生命倫理学的調査結果報告第四部　「蘇生の時間」と「病理解剖率」. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2009; 45(2):757
鈴木啓二　田村正徳; 4.新生児. 呼吸理学療法第 2 版三輪書店. 2009; 68-76
永井良三　五十嵐隆　ほか　田村正徳; 新生児仮死と標準的新生児蘇生法. 小児科　研修ノート診断と治療社. 2009; 340-342
木原秀樹　廣間武彦　中村友彦　宮川哲夫　田村正徳; NICU における呼吸理学療法の有効性と安全性に関する全国調査—第 2 報—. 日本未熟児新生児学会雑誌. 2009; 21(1):57-64
斎藤滋　田村正徳; シンポジウム 2「早産—予防・出生児の管理・手術の限界」座長のまとめ. 日本周産期・新生児学会雑誌. 2008; 44(4):829
側島久典　荒川ゆうき　長田浩平　川崎秀徳　浅野祥孝　星礼一　伊藤智朗　本田梨恵　高山千雅子　江崎勝一　國方徹也　鈴木啓二　田村正徳　小高明雄　馬場一憲　照井克生; シンポジウム 2「早産—予防・出生児の管理・手術の限界」胎児診断早産児小児外科症例への新生児科医としての管理への考察. 日本周産

期・新生児学会雑誌. 2008; 44(4):840-844
田村正徳、梶原眞人; NICU 入院児支援コーディネーターの配置について. NEWS LETTER No.55 別冊資料新生児医療連絡会. 2008; 55(57)
田村正徳　山口文佳; 予後不良とされる疾患への新生児科医師の対応と「重篤な疾患を持つ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン」の活用. 日本周産期・新生児医学会雑誌. 2008; 44(4):925-929
國方徹也、田村正徳; 重症染色体異常を伴った小児の治療方針２. 小児外科. 2008; 4010:113(8)-1141
田村正徳; 標準的な新生児心肺蘇生法をすべての周産期医療従事者に. Medical Tribune 2008; 41(37):72-73
田村正徳; NICU 入院中の新生児にみられる重大な医原性イベント. MMJ. 2008; 4(8):668-669
3 学会合同呼吸療法認定士認定委員会事務局; 新生児・乳幼児の呼吸管理. 第１３回３学会合同呼吸療法認定士・3 学会合同呼吸療法認定士認定講習会テキスト. 2008; 13:335-357
田村正徳　杉浦正俊; 日本周産期・新生児医学会の日本版新生児心肺蘇生法普及講習会推進事業NCPR紹介. ニキュ・メイト. 2008; 22:3-4
大関武彦　近藤直実　内山聖　杉本徹　田澤雄作　田村正徳　原田研介　福嶋義光　松石豊次郎　山口清次　脇口　宏; Consensus2005 に基づく新しい心肺蘇生法. 小児科学　第 3 版医学書院. 2008; 565-568
大関武彦　近藤直実　内山聖　杉本徹　田澤雄作　田村正徳　原田研介　福嶋義光　松石豊次郎　山口清次　脇口　宏; 重篤な疾患をもつ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン. 小児科学　第 3 版　医学書院. 2008; 663-665
田村正徳監　山南貞夫; 新生児蘇生法インストラクターマニュアル. 新生児蘇生法インストラクターマニュアルメジカルビュー社. 2008;
田村正徳; 新生児蘇生のｱﾙｺﾞﾘｽﾞﾑ解説. 日本産科婦人科学会雑誌. 2008; 60(3):961-971
田村正徳; 新しい考え方と Consensus2005 の概要. 臨床婦人科産科. 2008; 62(2):115-119
田村正徳; Consensus2005 に基づいた新生児蘇生法ガイドラインとその普及事業. 日本小児科学会雑誌. 2008; 112(1):1-7
杉本健郎、河原直人、田中英高、谷澤隆邦、田辺功、田村正徳、土屋滋、吉岡章; 超重症心身障害児の医療的ｹｱの現状と問題点-全国 8 府県のｱﾝｹｰﾄ調査-. 日本小児科学会雑誌. 2008; 1121:94-101
Ezaki S, Ito T, Suzuki K, Tamura M; Association between Total Antioxidant Capacity in Breast Milk and Postnatal Age in Days in Premature Infants.. Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition.. 2008; 42(2):133-137
Sachiko Iwatani,Osuke iwatani,Alan Bainbrige, Tomohiko Nakamura,Masanori Tamura,Toyojiro Matsuishi; Abnormal white matter appearance on term FLAIR predicts neuro-developmental outcome at 6-year-old following preterm birth. DEVELOPMENTAL NEUROSCIENCE. 2007; 25(8):523-30
田村正徳　河原直人; 第 5 回小児科学会倫理委員会公開ﾌｫｰﾗﾑ報告「病気の子供達の命の重さを如何に伝えるか-新生児から子供まで-」. 日本小児科学会雑誌. 2007; 111(12):140-147

（茨　聡）
松井貴子、茨　聡、丸山有子、他；鹿児島市立

病院における NICU 長期入院児の現状。日本周産期・新生児医学会雑誌.　2006；42:815-820.
松井孝子；　当院での DICU(発達支援集中治療室；Developmental Intensive Care Unit)開設前後における NICU 長期入院児を取り巻く環境の変化について。日本周産期・新生児医学会雑誌.　2009；45:1092-1094.

（中村友彦）
中村友彦　依田達也　廣間武彦　宮下進　三ツ橋偉子　平田善章　松井美優　向井妙子　斉藤依子　長野県総合周産期母子医療センター新生児病棟の問題点と課題　長野県母子衛生学会誌　2008;10:9-14
廣間武彦　中村友彦　NICU 満床の時　成功事例 周産期医学 2009;39:1211-1212
廣間武彦、中村友彦　新生児・妊産婦搬送受け入れ不能根絶のための新生児医療地域連携への取り組み　日本小児科学会雑誌　2010；114：1412-1418

（板橋家頭夫）
板橋家頭夫. **小さく生まれた子どもたち-授乳と離乳食.** チャイルド ヘルス 2009;12:648-653.
土岐彰. **【新・静脈栄養・経腸栄養ガイド　NST に必須の知識と実践のすべて】　静脈栄養の実際　末梢静脈栄養　施行中のチェック項目とフォローの進めかた.** Medical Practice 2009; 26(臨増):176-180.
土岐彰.　**【最新!新生児栄養管理ステップアップブック】実践編　疾患別の栄養管理 外科疾患合併児の栄養管理** Neonatal Care　2008 秋季増刊 p. 216-219.
田角勝.　**【最新!新生児栄養管理ステップアップブック】　実践編　疾患別の栄養管理　重度中枢神経の異常を合併した児の栄養管理.** Neonatal Care　2008 秋季増刊 p. 224-227.
土岐彰.　**【最新!新生児栄養管理ステップアップブック】　実践編　疾患別の栄養管理　NICU 入院児に対する経腸栄養剤の使い方と留意点.** Neonatal Care　2008 秋季増刊 p. 245-248.
田角勝.　**【最新!新生児栄養管理ステップアップブック】　実践編　NICU 退院後の栄養管理 在宅経管栄養の実際と管理.** Neonatal Care 2008 秋季増刊 p. 258-260.
板橋家頭夫.　新生児. 今日の病態栄養療法（渡辺明治、福井富穂編集），東京，南江堂，2008.
板橋家頭夫. **「NICU 卒業生」のフォローアップ　低出生体重児の栄養、離乳食の進めかた.** 小児科診療　2008; 71: 1459-1465.
板橋家頭夫. NICU とリハビリテーション-栄養管理と対策-. Journal of Clinical Rehabilitation 2008; 17:552-559.

（滝　敦子）
滝敦子、奥　起久子、渡部晋一、田中太平、中村友彦、田村正徳；NICU から退院できない長期人工呼吸管理患者の現状と在宅医療移行への阻害要因についての検討　　日本未熟児新生児学会第 23 巻 1 号 75-82 ページ、2011

（杉本健郎）
杉本健郎、田村正徳、重症児者の地域で安全・快適な生活保障を、滋賀県とびわこ学園の取り組みと今後の課題、2008、（子ども家庭総合研究事業によるブックレット）
杉本健郎編著、「医療的ケア」はじめの一歩、クリエイツかもがわ、京都、2009
杉本健郎；人工呼吸器装着児と気管切開児の医療的ケア、難病と在宅ケア 2009;15(2):31-35

杉本健郎、河本佳子、市川雅子、越智文子；医療的ケアの支援と各国の対応、小児在宅医療支援マニュアル（メディカ出版）2010;48-53

杉本健郎；医療的ケアとその実践と課題：障害ある子どもたちをとりまく現状、チャイルドヘルス 2010;13(11):47-49

杉本健郎、田村正徳、医療的ケア支援の必要なケアホーム(共同生活介護)訪問記、2011 年 1 月、(成育疾患克服等次世代育成基盤研究推進事業によるパンフレット)

（岩崎裕治）

岩崎裕治, 長期入院例　重症心身障害児施設の立場から, 周産期医学, 2009;39:1238-1240

（前田浩利）

前田浩利「小児在宅医療総論」、『在宅医療ガイドブック』　2008 年 11 月 P. 252-255

前田浩利「小児在宅医療」『明日の在宅医療』第２巻　在宅医療の諸相と方法　2008 年 1 月 P69-92

前田浩利　「開業医が進める小児在宅医療－その意義と実践－」　外来小児科 2009;12(2):167-185

前田浩利　「長期入院事例　在宅療養支援診療所の立場から」　周産期医学 2009;39(9):1241-1243

前田浩利　「小児在宅医療の実際－その実践のために」　在宅医療テキスト　2009;144-147

前田浩利　「小児の在宅緩和医療」在宅医療テキスト　2009;150-151

前田浩利「改定2版医療従事者と家族のための小児在宅医療支援マニュアル」　メディカ出版　2010年　5在宅療養支援診療所の役割191P~197P

前田浩利「在宅医療－午後から地域へ」　医学書院　2010 年　在宅小児医療　P103-107

学会発表

田村正徳; コンセンサス 2010 を受けた新生児蘇生法ガイドラインの解説; 日本周産期・新生児医学会学術集会. 2011.01. 佐賀県; 招待講演

田村正徳; 日本における NCPR の普及と Consensus2010 に基づく最新の新生児蘇生法ガイドライン紹介～2010 年版新ガイドラインの作成責任者による解説講演～; 長野県新生児看護セミナー. 2010.11. 長野県; 特別講演

田村正徳; ILCOR の Consensus2010 に基づく新しい新生児蘇生法ガイドライン; 埼玉新生児学講演会. 2010.11. 埼玉県; 特別講演

田村正徳; ILCOR の Consensus2010 に基づく新たな新生児蘇生法について; 北里大学医学部　神奈川県寄付講座「地域周産期・救急医療連携教育」開設記念講演会. 2010.11. 北里大学医学部; 特別講演

田村正徳; NICU と重症心身障害児の現状; 第 36 回日本重症心身障害学会. 2010.10. 東京都江戸川区; 招待講演

TAKAHIRO SUGIURA, SHINICHIRO MIZUTANI, TAKEHIRO MORISHITA, SHOKO ARAI, MASAYO UEDA,　MIRAI MUTO, YUMIKO OKUBO,　KEISUKE MIZUNO, AND MASANORI TAMURA; Participant Feedback on the Japanese Version of the Neonatal Resuscitation Program; The 3rd Congress of the European Academy of Paediatric Societies. 2010.10. デンマーク、コペンハーゲン

田村正徳; 新生児蘇生法 NCPR 普及事業の課題と ILCOR の Consensus2010 導入経過; 第 6 回長野県東信地区小児臨床談話会. 2010.10.

長野県; 特別講演

Masanori Tamura,Masanori Fujimura,Satoshi Kusuda,Fumika Yamaguchi,Averoy A. Fanaroff,Neil Marlow; Personal view on the management of babies born at less than 26 weeks' gestation; International Neonatal Forum. 2010.05. 盛岡

Masanori Tamura,Fumika Yamaguchi, Kanako Ito.; Treatment Preferences for the Neonates with Trisomy 18 in Japan.; Pediatric Academic Sosieties 2010. 2010.05. Vancouver Canada

長谷川朝彦　奈倉道明　高田栄子　側島久典　田村正徳; NICU 出身重症児の支援のために地域中核病院に必要な条件について; 第 52 回日本小児神経学会総会. 2010.05. 福岡市

奈倉道明　長谷川朝彦　高田栄子　側島久典　田村正徳; 重症児の緊急入院受け入れに関する全国アンケート調査について; 第 52 回日本小児神経学会総会. 2010.05. 福岡市

田村正徳; 新生児医療と重心医療; 第 121 回熊本小児科学会　熊本県寄付講座　重症心身障がい学講座　開設記念シンポジウム. 2010.05. 熊本市

田村正徳; 周産期医療体制強化に向けた考え方について; 全国救急・周産期医療等都道府県担当者会議. 2010.05. 東京都; 招待講演

田村正徳; 新生児医療と重心医療; 熊本県寄付講座　重症心身障がい学講座　開設記念シンポジウム　「重症心身障がい医療の展望」. 2010.05. 熊本県; 招待講演

田村正徳; 現在の日本版新生児心肺蘇生法普及プロジェクトの現状と課題; 神奈川県産科婦人科医会第 73 回周産期救急連絡会. 2010.03. 神奈川県横浜市; 招待講演

田村正徳; 急成長にある日本版新生児蘇生法講習会—全国動向—; 第 12 回新生児呼吸療法モニタリングフォーラム. 2010.02. 長野県大町市; 招待講演

田村正徳; Consensus2005 に基づく新生児蘇生—新生児蘇生法 NCPR 普及事業の現状と今後の方向性も含めて—; 三重県新生児懇話会学術講演会. 2009.09. 三重県; 特別講演

田村正徳; 小児呼吸管理のトピックス : 新生児における人工呼吸器関連肺障害ー慢性肺疾患とその防止戦略; 第 18 回日本集中治療医学会関東甲信越地方会. 2009.07. 長野県; 招待講演

田村正徳; Consensusu2005 に基づく日本版新生児心肺蘇生法ガイドラインと NCPR 事業紹介; 第 17 回北海道道北新生児医療研究会. 2009.06. 北海道　旭川グランドホテル; 特別講演

田村正徳; Consensusu2005 に基づく新生児心肺蘇生法ガイドライン; 第 27 回東京母性衛生学会学術集会. 2009.05. 東京; 招待講演

田村正徳; 「日本周産期・新生児医学会認定の新生児蘇生法 NCPR 普及事業紹介」; 第 116 回日本産科婦人科学会　関東連合地方部会総会・学術集会. 2008.11. 栃木県総合文化センター; 招待講演

田村正徳　仁志田博司　船戸正久　玉井真理子　池田一成　中村友彦　海野信也　久原とみ子; 重篤な疾患を持つ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン; 第 44 回日本周産期・新生児学会学術集会. 2008.07. 神奈川県横浜市

田村正徳; 重篤な疾患を持つ新生児の医療をめぐる話し合いのガイドライン; 第 45 回日本小児外科学会. 2008.05. 茨城県つくば市

杉本健郎、田村正徳; 人口呼吸器装着児と気管切開児医療的ケアの現況-小児科学会全国 8 府県調査から-; 第 50 回日本小児神経学会総会

第 50 回総会記念国際小児神経ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ. 2008.05. 東京

田村正徳; Japanese NCPR program and RCT of Cord Biood Milking for extremely preterm infants; Pediaatric Academic Societies and Asian Society for Pediatric Research. 2008.05. ハワイ; 招待講演

田村正徳; Neonatal; 第 1 回日本蘇生科学シンポジウム. 2008.03. 福岡県; 招待講演

田村正徳; 日本版新生児蘇生法ガイドラインとその普及のための NCPR 事業; 第 43 回日本周産期・新生児医学会. 2007.07. 東京; 基調講演

田村正徳; 新生児の呼吸管理：慢性肺疾患防止の観点から; 第 29 回日本呼吸療法医学会. 2007.07. 岡山; 基調講演

浅野祥孝 山口文佳　内田さつき　田村正徳; 新生児の時間外外来受診についての検討—第 2 報—分娩施設での退院時指導の重要性; 第 43 回日本周産期・新生児学会学術集会. 2007.07. 東京都赤坂

田村正徳; 「病気のこども達の命の重さを如何に伝えるかー新生児から小児までー」開催によせて; 第 5 回日本小児科学会倫理委員会公開フォーラム「病気の子ども達に命の重さを如何に伝えるかー. 2007.07. グランドプリンスホテル赤坂

田村正徳; 新生児医療における生命倫理的問題と話し合いのガイドライン; 第 462 回長野市小児科集談会. 2007.06. 長野市; 特別講演

M.Tamura,H Nishida,M Tamai,K Kabe,T Sahashi,H Yamaguchi.; Guidelines for Healthcare Providers and Parents to Follow in Determining the Medical Care of Criyically Ill Babies.; Pediatric Academic Sosieties'2007. 2007.05. Toronto Canada

（中村友彦）

木原秀樹、廣間武彦、中村友彦　NICU 長期入院児の在宅移行プロトコールの導入　第 54 会日本未熟児新生児学会　2009;11.29-12.1 横浜

新井隆広　吉富晋作　中矢雅治　北瀬悠磨　中村秀勝　武居裕子　奥野慈雨　三代澤幸秀　関口和人　小西祥平　小久保雅代　廣間武彦　中村友彦　NICU入院児の在宅支援病棟転棟についての検討　第55回日本未熟児新生児学会　2010.11.5-7　神戸

（側島久典）

側島久典、國方徹也、高田栄子、森脇浩一、田村正徳；ミニシンポジウム：NICU 長期入院児の在宅ケア促進に向けた地域の取り組み「NICU と小児科病棟スタッフ間でのNICU長期入院児認識の共有と在宅医療へ向けての対応」, 第54回日本未熟児新生児学会　平成21年11月横浜

側島久典、栗嶋クララ、石黒秋生、江崎勝一　國方徹也、田村正徳；「NICU入院中からの、長期入院児在宅医療に向けた家族とスタッフへの意識づけガイドライン作成の試み」, 第55回日本未熟児新生児学会　平成22年11月、神戸

（滝　敦子）

滝敦子、奥起久子、渡部晋一、田中太平、中村友彦、田村正徳；全国 NICU 施設における在宅人工呼吸管理に関するアンケート調査　第 1 報　各施設の在宅人工換気患者フォロー体制について

第 42 回日本周産期・新生児医学会学術総会　平成 19 年 7 月

滝敦子、奥起久子、渡部晋一、田中太平、中村友彦、田村正徳；全国 NICU 施設における在宅人工呼吸管理に関するアンケート調査　第 2 報　NICU 入院中の長期人工呼吸管理患者と在

宅人工呼吸管理患者について　第 42 回日本周産期・新生児医学会学術総会　平成 19 年 7 月
滝敦子、奥起久子、渡部晋一、田中太平、中村友彦、田村正徳；NICU 長期入院中の人工換気患者の在宅人工呼吸への移行における問題点ー全国 NICU 施設および患者家族へのアンケート調査よりー　第４回　Neonatal Care Forum in Tokyo Metropolitan Area（首都圏新生児フォーラム）平成 20 年 9 月

（岩崎裕治）
岩崎裕治：重症心身障害児(者)施設のショートステイの現状　第５２回日本小児神経学会イブニングセミナー　2010福岡
岩崎裕治他：当センターでの短期入所の現状ー特に入所中の体調変化について　第36回日本重症心身障害学会　2010東京
宮野前健：国立病院機構病院の“ポストNICU児”への取り組み　第36回日本重症心身障害学会　シンポジウム2　NICUと重症心身障害児(者)施設（病棟）との連携　2010東京
家室和宏：NICUと重症児施設との連携を考える　第36回日本重症心身障害学会　シンポジウム2　NICUと重症心身障害児(者)施設（病棟）との連携　2010東京

（前田浩利）
前田浩利；2009 年 2 月 28 日第 11 回日本在宅医学会ランチオンセミナー「小児在宅医療」
前田浩利；2009 年 5 月 28 日　第 51 回日本小児神経学会シンポジウム「重症心身障害児の在宅医療」にて発表
前田浩利；2010年5月22日　日本脳性麻痺研究会　教育講演

医療的ケアを必要とする
乳幼児のための在宅支援研究会

お問い合わせ

トップページ　代表挨拶　議論の対象とする病態　入会のご案内　運営委員一覧　関連サイトリンク

CONTENTS

- 代表挨拶
- 議論の対象とする病態
- 入会のご案内
- 規約
- 運営委員一覧
- 在宅支援に関する情報集
  - ・関連サイトリンク集
  - ・在宅支援機関リスト
  - ・関連研究会/講習会等のご案内
  - ・自治体の取り組み
  - ・海外の紹介

MANUAL

- 在宅支援マニュアル
- 栄養管理マニュアル

MAILING LIST

- メーリングリストへの投稿
- 過去アーカイブの閲覧

OUR STUDY

- 研究者一覧
- 研究報告書
  - ・平成20年度報告書
  - ・平成21年度報告書
  - ・平成22年度報告書

在宅支援マニュアル

パブリックコメントを募集中です

在宅支援マニュアルの各ページの最後にコメント欄があります。是非、そこから御意見を投稿してください。投稿されたコメントは、自動的にメーリングリストへ配信されます。（メーリングリストからの投稿は、コメント欄に反映されませんのでご注意ください）

第１章

在宅医療に向けてのステップ

第２章

各ステップの概要

第３章

家族への日常的ケアの指導
家族への医療的ケアの指導
ー在宅人工呼吸管理（各機種の特徴）
ー在宅人工呼吸管理（取扱い、回路組立方法、トラブルシューティング）
ー在宅人工呼吸管理（付属品）
ー気管切開管理
ー経管栄養管理
ケア指導の体系化
ーある症例の実例
家族への救急蘇生法の指導
福祉サービスの手続き
退院、外来受診
医療機関への連絡

第４章

特別児童扶養手当
障害児福祉手当
障害者自立支援法の制定の背景
自律支援法の具体的内容
福祉サービス
利用の手続き
障害児の利用者負担
身体障害者手帳
療育手帳

ダウンロード

ダウンロード

※ お問合わせは、FAXまたはお問い合わせフォームよりご連絡ください。
〒350-8550
埼玉県川越市鴨田1981番地
埼玉医科大学総合医療センター　小児科
FAX:049-226-1424

| サイトマップ | プライバシーポリシー | お問い合わせ |

Copyrights 医療的ケアを必要とする乳幼児のための在宅支援研究会 All Rights Reserved.

重症新生児に対する療養・療育環境の拡充に関する総合研究

	氏名	所属施設	職名
研究代表者	田村　正徳	埼玉医科大学総合医療センター	小児科教授
研究分担者	楠田　聡	東京女子医科大学母子総合医療センター	新生児部門教授
研究分担者	茨　聡	鹿児島市立病院総合周産期センター	部長
研究分担者	板橋　家頭夫	昭和大学医学部	小児科教授
研究分担者	杉本　健郎	すぎもとボーン・クリニーク	院長
研究分担者	前田　浩利	医療法人あおぞら診療所新松戸	院長
研究分担者	飯田　浩一	大分県立病院総合周産期センター	新生児科部長
研究分担者	岩崎　裕治	都立東部量育センター	副院長
研究協力者	梶原　真人	愛媛県立中央病院	院長
研究協力者	田角　勝	昭和大学医学部	小児科教授
研究協力者	土岐　彰	昭和大学医学部	小児外科教授
研究協力者	倉澤　卓也	独立行政法人国立病院機構　南京都病院	院長
研究協力者	家室　和宏	やまびこ医療福祉センター	院長
研究協力者	益山　龍雄	都立東部療育センター	診療部長
研究協力者	宮野　前健	独立行政法人国立病院機構　南京都病院	
研究協力者	余谷　暢之	国立成育医療センター	総合診療部
研究協力者	冨田　直	都立小児総合医療センター	総合診療部医長
研究協力者	側島　久典	埼玉医科大学総合医療センター	新生児科教授
研究協力者	曽根　翠	都立東大和療育センター	小児科医長
研究協力者	福水　道郎	都立府中療育センター	小児科部長
研究協力者	田沼　直之	都立府中療育センター	
研究協力者	木内　昌子	都立東部療育センター	
研究協力者	小山　久仁子	都立東部療育センター	
研究協力者	松井　貴子	鹿児島市立病院総合周産期センター	

研究協力者	徳久　琢也	鹿児島市立病院総合周産期センター	
研究協力者	中澤　祐介	鹿児島市立病院総合周産期センター	新生児科
研究協力者	國方　徹也	埼玉医科大学総合医療センター	新生児科
研究協力者	森脇　浩一	埼玉医科大学総合医療センター	小児科
研究協力者	櫻井　淑男	埼玉医科大学総合医療センター	小児科
研究協力者	高田　栄子	埼玉医科大学総合医療センター	小児科
研究協力者	奈倉　道明	埼玉医科大学総合医療センター	小児科
研究協力者	鈴木　啓二	埼玉医科大学総合医療センター	新生児科
研究協力者	長谷川　朝彦	埼玉医科大学総合医療センター	小児科
研究協力者	中村　友彦	長野県立子ども病院	新生児科
研究協力者	木原　秀樹	長野県立子ども病院	新生児科
研究協力者	平澤　恭子	東京女子医大	小児科
研究協力員	山口　文佳	東京女子医大	小児科
研究協力員	小枝　久子	東京女子医大	小児科
研究協力者	滝　敦子	川口市立医療センター	新生児科
研究協力者	内田　美恵子	長野県立病院研修センター	
研究協力者	牧内　明子	長野県立子ども病院	
研究協力者	奥原　真澄	長野県立子ども病院	

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
田村正徳他	新生児蘇生	勝沼俊雄	小児科診療 小児の治療指針 2010年増刊号	診断と治療社	東京都	2010	73:827-830
田村正徳他	重篤患児の家族との話し合いのガイドライン	五十嵐隆 渡辺とよ子	小児科臨床ピクシス16　新生児医療	中山書店	東京都	2010	26-27
櫻井淑男 田村正徳	小児集中治療	島崎修次監 前川剛志監 岡元和文編 横田裕行編	救急・集中治療医学レビュー　2010	総合医学社		2010	301-306
藤村正哲監　田村正徳編　森林太郎編　他	科学的根拠に基づいた　新生児慢性肺疾患の診療指針	藤村正哲監　田村正徳編	改訂2版　科学的根拠に基づいた　新生児慢性肺疾患の診療指針	ＭＣメディカ出版	大阪府	2010	1-128
池之上克 近藤潤子 神谷直樹 宮崎亮一郎　田村正徳他	助産師業務ガイドライン　2009改定版	日本助産師会	助産師業務ガイドライン 2009改定版	社団法人日本助産師会	東京都	2009	
町浦美智子　大橋一友　中嶋有加里　田村正徳 他	分娩期の診断とケア	日本看護協会出版会	新生児の蘇生. 助産師基礎教育テキスト　第5巻　分娩期の診断とケア	日本看護協会出版会	東京都	2009	189-200
鈴木啓二 田村正徳	新生児		呼吸理学療法　第2版	三輪書店	東京都	2009	68-76
永井良三 五十嵐隆　田村正徳 ほか	新生児仮死と標準的新生児蘇生法		小児科　研修ノート	診断と治療社	東京都	2009	340-342